

1年A組	こんなところには入れたよ！	松尾 友絵
------	---------------	-------

1 題材について

低学年の造形活動は、全身活動である。直接材料に触れ、手や体全体を動かして材料に働きかける。この感覚を味わうことは幼稚園から低学年の子どもにとってとても大切なことである。材料を体全体で感じながら思いついた活動をしていく中で、子どもたちは材料の色や形の特徴に気づき、よりよくものとかかわろうとしていく。これは、図工科で大切にしたい学びの姿である。

本題材は、子どもが体全体を使って材料を感じるだけでなく、自分も巻き込んだ造形活動をしていく題材である。体が入るような大きな入れ物が主材料であり、その子の場になる。子どもが体全体の感覚を働かせて材料とかかわることが大きなねらいとなるが、材料や場所とかかわる中から生まれた思いを大切に、思いのままにどんどん活動を進めていくことも願って学習計画を立てた。

子どもにとって、箱の中やモノの隙間に入ることは楽しいことである。普段から子どもたちは、オルガンの下に入って遊んだり、教室の壁と本棚の間に基地を作ったり、クラスのブロック箱に入ってブロックをお風呂の湯に見立てて遊んだりしている。これらの場は子どもにとって、“隠れるおもしろさが味わえる場所”であるだけでなく、“自分だけの空間”でもあるのだろう。

第1次では、「ここに入れそうだな」と思った場所にどんどん入ってみる。足から入ったり体をねじ曲げたりして入り方を工夫したり、スチールの道具入れのつるつる感と冷たさを味わったりするなかで、子どもたちは、モノの形や大きさや材質を体感していく。体全体でモノを感じることでモノ感覚が養われていくのである。第1次のこの活動が、子どもがモノと自分との関係を見つめる大切な学習になる。第2次では自分が入った場所の中から気に入った場所を選び、自分の好きな空間にしていくことを提案する。ここでは、子どもが、思いついたことを自由に試したり自分の表現を選択したりすることを願って場の設定に留意した。気に入った場所を選ぶ時には、「体がびったりはまるから」「入った感じが気持ちいいから」「いつもは入れない場所だから」等、その子の価値観が見えてくる。その場所をお気に入りの空間にしようと活動する時には、使う材料も思いをもって選ぶ。いろいろな場面で見えてくるその子らしさをみとり、その子の思いに寄り添った支援をすることで、子どもの思いは持続し次への意欲につながる。

子どもは材料をもとにした楽しい造形活動（造形遊び）の中では、常に材料や周りとのコミュニケーションをとりながら活動している。つまり、自然な形での鑑賞は行っていることになる。本題材では、造形遊びの中に鑑賞を意図的に位置づけること（材料や活動をめあてをもって「みる」こと、意識的に「みる」こと）で、その後の子どもの活動にひろがりや深まりが生まれるのではないかと考え、第1次、第2次、第3次のそれぞれの学習の場面で、鑑賞をクローズアップさせてみた。

【学習の目標】

- ・自分が入れる「こんなところ」を見つけて入ることを楽しむ。

- ・自分が入った「こんなところ」をもっと〇〇にしようという思いをもち、工夫しながら活動する。
- ・自分や友達の活動のよさをみつけ、楽しくみる。

2 実践の考察

《第1次》 こんなところに はいれたよ!

3モジュール

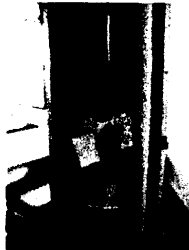
「いつもは入らないんだけど、こんな所に入ってみたいな」「ここなら入れるかも」という所を見つけて入ってみよう。

と投げかけると、子どもたちは「机の下!」「ロッカーの中に入れそう」など、すぐに教室の中で入れそうな場所を見つけようとし始めた。約束として、①体が半分は入る場所であること ②何かが入っているときは外に出していいが、後で必ず戻すこと の2つを伝え、活動を開始した。

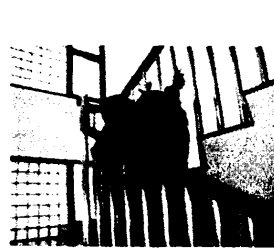
子どもの活動を把握するために、学習カードを使った。入れる場所をたくさん見つけてどんどん試してほしいと思ったので、入った場所を全て記入する形式のカードにした。子どもたちは次々と入れる場所を見つけて入っていたので、このカードは効果的であったと言える。カードを分析すると、入ってみる場所にその子らしさがあらわれていることがみとれた。



水筒置ききの机の下



展示パネルのすき間



階段の手すりのすき間



整理棚の中

〔着目児☆〕ソファの下や、階段の手すり、机の下など体を伸ばして入れる場所を選んで入っていた。気に入った場所には掃除道具入れを選んだ（これも体を伸ばして入れる場所）。自分が他の誰よりも先に見つけたことと、扉が閉められることが良かったらしい。

〔着目児△〕クラス全体に「入ってみたい場所ある?」と聞いた時、真っ先に「後ろの棚の中」と答えた。入れそうな場所がいくつか思い浮かんだようだ。場所を探し回って「入れそうだな」と思った所に入るのではなく、最初に思いついた場所に入ることを優先的に試した子である。すぐに入れる場所を選ぶ子が多い中、本児は荷物が入っていても、それを手際よく出して入っていた。後ろの棚の中と電話ボックスの下がお気に入りの場所である。

《ここでの鑑賞の方法と目的》 → 個人活動

- ・入れる場所を探すために身のまわりのモノや場所をみる。
- ・実際に入ってみることでその場所を体感する。

材料箱など、普段は目的に応じて使っている場所に自分が入ることを子どもたちはまず楽しんだ。「こんなところに入れたよ」という驚きを感じるとともに、入れる場所をたくさん見つけられた喜びを味わっていた。「こんな入り方もできるよ」「ここにこうやって入ると〇〇みたいだ」など、入り方を変えてみたり入っている状態を何かに見立てたりする子もいた。また、入れる場所を見つけた驚きを友達と共有し合ったり、自分の気に入った場所を知らせ合う姿も見られた。

《次の日の朝の会》 みんなが入った場所を見てみよう → 全体での鑑賞

「こんなところ」に入っている写真をテレビに映してみんなで見えた。自分が入っている姿を自分で見ることは難しい。デジカメで撮った姿を見ることで、「こんなところ」に入った時に味わった感覚とはまた違い、入る場所と一体化した自分の姿を見ることができる。子どもたちからは、「ぼくもここにはいった」「こんな場所もあったんや」という声の他に、「〇〇ちゃんベッドに寝てるみたい」「お風呂みたいで気持ちよさそう」「机と合体してるで」など、入っている姿から次の活動へのきっかけになるような言葉も出てきていた。

《第2次》「こんなところ」を〇〇にしよう! 9モジュール

自分のお気に入りの「こんなところ」を1つ選んで、「こんなところ」を〇〇にしていこう。

見つけた場所を自分だけの空間にしていくことの提案である。普段の目的にあった空間を考える子、自分が入った状態から思いついた活動をしていく子、家や基地のように自分だけの場所にしていく子…。子どもたちは、いつもの場所がいつもと違ったものになるおもしろさを味わいながら活動を進めていくことができた。

活動が進んでいくと、入る場所を自分の思うように変えていくことに夢中になってしまい、「こんなところ」に自分が入ることを忘れがちになる子がでてきた。学習の途中や終わりに「こんなところ」に入ってみるよう声をかけた。

《ここでの鑑賞の方法と目的》→ 個人活動

- ・使うものを選ぶために材料をみる。
 - ・思うように進んでいるかをみるために、少し離れてその場所をみる。
 - ・鏡やデジカメで撮ったもので、その場所に入っている自分をみる。
 - ・友達の活動をみる。
- 次へ

子どもが自分の活動をみたい時にみられるようにするために、①デジカメで入っているところを撮ってその場でみる ②近くの友達に鏡を持ってもらって入っている自分を見る という方法をとった。また、朝の会を鑑賞に時間として位置づけ、こんな所に入っている写真をみんなで見たり、自分や友達の途中の活動を実際に見に行ったりした。子どもたちは友達の活動をみて、いいと思ったことは自分の活動に取り入れたりもしていた。

活動範囲が広く、中には休憩時間も活動している子もいる為、学習カードを、子どものその日の活動と次への思い（SOSも）を知る助けとして利用した。

〔着目児☆〕形と質感から、掃除道具入れをロボットに見立て、自分がロボットの中に入ろうと考えた。外にカップで目をつけペットボトルで両脇に耳をつけた。内部にもいろいろくっつけたが、これらは自分の中に入ると見えなくなる。入った姿を写真に撮ってみて感想を聞いたら、扉は閉めるので構わないようだった。次に本児は、ペットボトルの耳に色水を作って入れた。重くなった分、固定するのに苦労していたが、接着方法を変えることで解決することができた。いつもは、上手くいかないと安易に方向転換する傾向がある本児だが、この学習では試行錯誤しながら自分のイメージを形にしていく姿が見られた。

〔着目児△〕教室の後ろの整理棚に入って牛乳パックをつなげて柱をつくり、新聞紙で屋根をつくった。家みたいにするつもりらしい。整理棚には全身が入らないので、整理棚の前の床にスペースを求めた。入ってみることを活動中に何度も試した子である。出入りする度に新聞の屋根が破れるので、新聞を外してビニル袋の屋根に変えた。初めに持ったイメージが強い分、材料も「これでないと!」とこだわるころがある本児。この学習では、材料や接着方法を選び、必要に応じて改良を加えながら活動を進めていくことができた。

「こんなところ」の鑑賞会をするよ。どんな鑑賞会にするか、みんなで考えよう。

「こんなところ」を味わう時間である。鑑賞会について子どもたちからは、「みてまわるだけに」「自分がいる時に入ってもらおう」「他のクラスの子も入れるように休憩にする」等、いろいろな意見が出てきたが、「1Aだけで自由に入り合う鑑賞会」をすることに決まった。入るときの注意がある子はみんなの前で言っておいてから、鑑賞会をした。

《ここでの鑑賞の方法と目的》→ 全体での鑑賞

- ・「こんなところ」に招待し合い、できあがった場を味わう。
- ・自分や友達「こんなところ」に入って記念撮影したものをみる。

3 今後の課題と展望

図画工作科学習では、子どもが自由に感覚をひろげて思いのままに表現できる題材と、子どもが感覚を研ぎすまして自分なりの表現を見つけたり生み出したりする題材の両方を組み合わせてカリキュラムを組むことが必要だと考えて学習を進めてきた。そうすることにより、子どもの表現にひろがりや深まりが生まれ、その子らしいよさや可能性を発揮する素地ができると考えたからである。

今回の学習は、深めるよりもひろげることが目的としていたので、活動の自由度が高く、子どもは「次はこうしたい」「もっとこんなふうに」という思いをもって活動できていた。子どもの活動が多岐にわたっていたので、一人一人の変容をみとりにくかったが、学習カードを利用することによって、活動が進むにつれて子どもの思いがより具体的な表現欲求に変わり、試行錯誤しながら対象とかかわっていることがみてとれた。

本題材を、子どもがその子らしさを発揮し意欲的に活動できる題材であったか、子どもの意識の流れに沿った学習計画であったかという観点から振り返ってみる。第1次では、子どもたちは体全体を使ってモノを感じ、感覚を働かせて造形活動を楽しむことができた。第2次では、自分の気に入った場所をもっと〇〇にしようと思いをもち活動することができた。子どもたちは意欲的に活動し、その子らしさも発揮していたと言える。しかし、第1次と第2次の間の意識のつながりが子どもたちには今ひとつ無かった。第2次では、自分の場所を楽しくすることやきれいにかざることや〇〇みたいにするに熱中し、自分が入るという意識が薄れていた子が多くいた。子どもたちにとって、「こんなところ」は、どんどん進化させていい自分の場所であり、「入る」必然性はなくなっていたのだろう。第1次で味わった“感じ”を次へつなげ、その子がひろげたり深めたりしていける学習計画であったとは言えない。今後も、題材でねらうものを大切にしながらも、子どもの意識の流れに沿った学習計画を工夫していく必要がある。

4 実践研究テーマの設定

今年度に引き続き、「自分らしいよさや可能性を発揮し、つくりだす喜びを味わう子を育てる」をテーマにし、子どもの表現意欲が高まる図工科学習を展開していきたいと考えている。子どもがつくり出す喜びを味わえるような題材の開発と、その子らしさが見えるような学習計画の工夫を、今後も考えていきたい。その中で、一人一人の子どもをどうみとっていくかについても探していきたい。